

8

古代国家のあゆみ

■古墳がつくられた時代

古墳とは、土あるいは石を積んだ墳丘をもち、その内部に遺体をおさめる施設をつくって、鏡などの副葬品をおさめている墓のことで、死者に対する手厚い埋葬の方法である。ここに埋葬された人物は地域を支配した実力者と考えられ、古墳はその人物のための個人墓であり、権力の象徴であったといえる。したがって古墳の出現は、政治的権力者の登場、政治的社会への変質を意味している。この時代を前の



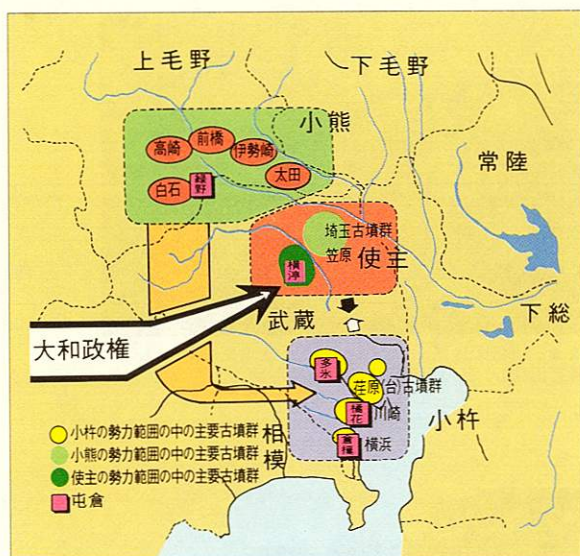
埼玉古墳群の丸墓山古墳より稲荷山古墳をのぞむ(埼玉県行田市) 北武蔵を代表する古墳群である。この地域では、5世紀後半から7世紀初頭にかけて南関東とは対照的に大規模な古墳がつくられた。



野毛大塚古墳(世田谷区) 5世紀初頭につくられた全長約84mの帆立貝式古墳。6世紀以降になると南武蔵ではこのような大型の古墳がつくられなくなりその規模を縮小していく。

弥生時代と区別して、古墳がつくられた時代、古墳時代とよんでいる。

日本の古墳は三世紀から七世紀にかけてつくられ、南は九州南部から北は東北中部までに分布し、形も円墳、方墳、前方後円墳をはじめ八角形古墳など、変化に富んでいる。古墳時代は通常古墳の規模や副葬品などから、前期、中期、後期に三区分されているが、前期の前に発生期、後期のあとに終末期の古墳という名称を用



武蔵国造の乱の勢力分布図(東京都教育委員会『発掘物語』参考) 関東地方の古墳群の関係を、『日本書紀』の記述と結びつけた解釈があるが、いまだはっきりとはしていない。

とする南武蔵古墳群と、荒川流域の埼玉県行田市の埼玉古墳群に代表される北武蔵の二地域を核として分布している。この南と北の武蔵国の古墳群の存在と大和政権との関係が、武蔵国造の乱の解釈をふまえて考えられている。『日本書紀』によると、五三四年(安閑天皇元)、武蔵国造笠原直使主かさはらのあたけのみと同族の小杵おきとが、国造の地位をめぐる対立した。小杵は大和政権に従う姿勢はなく、上毛野かみつけの(群馬県)地方の豪族上毛野君小熊かみつけのみくまと結び、使主を討とうとした。これに対し、使主は大和政権に訴え出て助けを求めた。この対立が、東国の有力豪族上毛野君と大和政権との戦乱に発展したのである。

いてよぶこともある。

古墳時代前期は四世紀を中心とする時代で、古墳の副葬品には鏡、玉、剣といった呪術的要素の強いものが多くみられ、葬られた人物が司祭的性格をもっていたことを示している。中期は五世紀を中心としており、墳丘の大規模化、分布の拡大がみられる。副葬品も馬具や武器などの軍事的性格をもつものが多い。後期は六、七世紀にあたり、多数の小規模な古墳が集中する群集墳を特色としている。

群集墳の出現は、古墳の築造が支配者層だけでなく、有力農民の家父長層といった地域集団の富裕階層にまで広まったことを示している。

■古代武蔵国の権力闘争

武蔵国の古墳は、狛江古墳群など多摩川下流域を中心



宮ヶ谷戸遺跡4号住出土土器(あきる野市 写真はあきる野市教育委員会蔵) 古墳時代の住居跡宮ヶ谷戸遺跡4号住居からは、このように多くの土器が出土している。食料の煮炊きや貯蔵用の甕(かめ)や甔(こしき)、盛りつけに使われた皿である坏(つぎ)などがある。

宮ヶ谷戸遺跡4号住居(あきる野市 写真はあきる野市教育委員会蔵) この住居跡は古墳時代後半のものである。この地域は古墳時代の集落で、隣接する雨間地区遺跡からも大型の住居跡を含め14軒が確認されている。



して調理する方法も行われるようになった。米のほかに麦、稗、大豆などの雑穀や豆類のほか、野菜も食前にのぼるようになった。ときに応じて、縄文時代以来の採集や漁撈も食生活に潤いを与えていた。

に、大和政権の力が海路から及んできたことを物語っていると考えられる。この一帯の古墳は、多摩川下流域を支配した盟主的酋長の墳墓であろう。ところが五世紀以降、多摩川下流域では、大型の前方後円墳が築造されることはなく、南武蔵の古墳群は規模を縮小していった。それに対し、北武蔵では大規模な前方後円墳が築造されており、対照的なあり方を示している。

このような古墳時代の人びとの生活の様子は、遺跡や出土品から知ることができる。昭島市の山ノ神遺跡(福生市と昭島市との境界)や、八王子地域の古墳時代の遺跡からは、鉄製の鎌、鋤、斧なども発見されており、鉄製品が徐々に生活のなかに取り入れられていったことがわかる。またこの時代、食生活はかまどの導人によって大きく進歩し、甔を使って蒸